

# 月坡道印の詩作——佳境詠の視点から——

伊藤 達 氏

はじめに

筆者は本紀要第二十二号に「月坡道印と小澤蘆庵の十牛図」と題して近世前期の曹洞宗の僧、月坡道印の『うしかひ草』（寛文九年刊）について触れた。当該書は仮名草子の一書であり、廓庵十牛図を基として二章を追加し、全図を和文・和歌によってその境地を表現したものである。廓庵十牛図は図、小序、廓庵の頌、石鼓夷・壞衲璉の和韻から成るが、月坡は和文・和歌で各図の趣意を示しており、漢から和への表現性の変換を試みている。全十二章を一章ずつ正月から十二月に割り当て、四季の景物の叙述を主として物語が展開されており、禅用語を用いず平易な文章で表現される。各章の最後に文章と相応する和歌二首が詠まれているが、月坡の紀行文『手ごとの花』（元禄二〜六年成）を見ると、漢詩の他に自詠の和歌五十八首が掲載されており、和歌も自己の表現方法の一つとしていた。月坡の和文・和歌については両書に体现されるが、やはり月坡は禅僧であり三種の詩集、各語録を参照すると詩の方に比重があることは明らかであろう。岡田宜法氏は月坡を詩星として宗門屈指の宗匠であり、その風格は松堂高

盛を凌ぎ、大智祖継と拮抗するものと評価される。月坡の詩には自宗の教義、自己の宗教的境地、旅懷を賦したるなど多岐にわたるが、佳境を歌った詩作が詩集の中で大きな位置を占めている。その中には自己の心情、禪的境地、日々の生活、自然の景物・環境が歌われており、禅僧及び詩人としての月坡を見る上で重要であると考えられる。本稿では月坡の詩作の中で佳境を賦した詩に焦点を当て、その特質を探索することを目標とするものである。なお月坡の伝記については前稿で簡略に触れたが、その後調べ得た事もあるのでここに記して置きたい。

月坡は寛永十四年(一六三七)近江国大津に生まれ、父方の祖は近江源氏の庶流、本姓は源、母は大倉氏。幼時父を亡くし、八歳のとき僊寿印のもとで薙髮。次いで竹龍遵公に就いて学ぶ。二十院あまりを歴遊するが、紙上の語のみを教えとしていることに不満を抱き、播州の雲晴寺にて百丈野狐の機縁によって宗旨を究めた。その後黄檗山に到り、隠元隆琦・木菴性瑫・即非如一に謁し、隆琦からは「此の僧巴はびす鼻子有すり」(「月坡禅師行実」とされるものの、衆徒との気風が合わず辞し、寛文四年(一六六四)二十八歳のとき、比良山獅子谷(現、大津市北小松)に庵を結び獅子庵と号し山居の生活を送る。同七年(一六六七)三十一歳、郡長により庵を追われ、逢坂山の蟬丸旧址に庵を移し琵琶苑と号した。寛文九年(一六六九)三十三歳、龍睡愚隱の法を嗣ぎ、永平寺に登り道元の高塔を拝した。同十年(一六七〇)三十四歳、加賀黄龍山献珠寺に晋山。延宝四年(一六七八)四十二歳、徳川光圀に請われ水戸の岱宗山たいそうざん天徳寺に入る。天和元年(一六八一)四十五歳、龍睡の後継として金沢の金龍山天徳院の三世を継ぐ。元禄元年(一六八八)五十二歳、再び水戸天徳寺に戻り、同四年(一六九一)五十五歳、光圀に帰郷が許され大津に帰郷。同五年(一六九二)五十六歳、山城山科に大宅寺を開基する。以後、東海・北陸・近畿・山陽・山陰の各地を巡る。享保元年(一七二六)八十歳にて示寂<sup>(2)</sup>。

月坡の事跡は各語録に附された「行実」や詩集によって知られるが、若年には獅子谷、琵琶苑に寓居し山居生活

を送ったことがその詩作に表われている。壮年以降大宅寺を開基し退隱するまでは加賀の猷珠寺・天徳院、水戸の天徳寺というように北陸と関東を往還している。本稿では月坡の若年に詠まれた佳境詠を取り上げたいが、佳境に臨み詩を賦すことは漢詩人の基本的な詠作のありかたである。中国・日本において佳境を賦す詩作は多く存する。佳境に臨み風致、自己の心情を表現することは詩人にとって大きな課題であり、悦楽でもあつたらう。月坡の場合禅僧ということもあり、三十代の折兩度の山居生活を営んでいるが、当地においてそれぞれ二種、計四種の佳境詠を詠じている。この他延宝五年（一六六七）水戸天徳寺住持時代に詠まれた佳境詠があるが、今回は月坡の詩集に載る、初期の詩作である四種の作品に焦点を当てたい。水戸での佳境詠については別稿で触れることにする。なお佳境と関連するものとして禅宗には境致きょうちという概念があり、月坡も四種の境致を詠じた詩を賦しているが、これは禅院の内部及び周辺の光景を指すものである。したがって本稿では非寺院であり山居の折に詠まれ、風致を賞美する心がある基底にあり、かつ連作で構成される一連の詩作を佳境詠として取り上げたい。

### 一 月坡の佳境詠の概要と「比良山獅子谷居」

月坡には語録の他に詩集として『菴居全集』（三卷一冊。寛文十二年刊）、『月坡禪師禪偈清吟』（二卷一冊。延宝九年刊）、『南去北来』（三卷一冊。元禄十五年跋刊）の三種が存する。この内佳境詠は『菴居全集』『月坡禪師禪偈清吟』に所載されており、年次とともに左に掲出する。題は『菴居全集』による。

#### 「比良山獅子谷居」（全三十首）

月坡道印の詩作―佳境詠の視点から―（伊藤）

\*寛文四年（二六六四）～寛文七年（二六六七）詠。『月坡禪師禪偈清吟』巻二に所載。新たに五首を附す（全三十五首）。

〔題獅子庵八境〕（無露頂・仏座峰・紫雲嶺・法華灘・桜桃溪・瀑布泉・栗原村・龍華村）

\*寛文五年（二六六五）詠。『月坡禪師禪偈清吟』巻二に所載。

〔関山琵琶苑居〕（全十首）

\*寛文七年（二六六七）詠。『月坡禪師禪偈清吟』巻二に所載。

〔題琵琶亭六境〕（慈光春晚・湖上梵音・関山月色・調絃松風・草錫清泉・門巷絡繹）

\*寛文七年（二六六七）詠。『月坡禪師禪偈清吟』巻二に所載。

初度の山居―獅子谷住―の二種、後度の琵琶苑居―関山（逢坂山）住―の二種、計四種が佳境詠として挙げられ、月坡の二十八歳から三十一歳の間に詠じられている。一連の詩は連作であり、獅子庵八境・琵琶苑六境は名勝の選定・命名を行っている。月坡は寛文十年に猷珠寺に晋山するまで山居生活を送っており、僧侶としての初めは野にあった。当期の佳境詠について詩人・僧侶としての月坡にどのような表現が見られ、いかなる趣意が存するのかが探ってきた。なお『菴居全集』と『月坡禪師禪偈清吟』の異同についても見なければならぬが、今回は『菴居全集』の本文に就くことにする。

始めに「比良山獅子谷居」(上巻)を見る。<sup>(6)</sup>当該詩は三十首(『月坡清吟』では三十五首)にのぼるが、そこには隠棲の楽しみ、禅僧としての内省、風致への憧憬、山居生活の趣、耕作のありよう、修行者としての実践躬行、宗教的境地などが賦されている。詩作によって止揚された表現内容と実生活の間には自ずと隔たりはあるだろうが、表現された結果としての詩を受容することにした。

比良山獅子谷居

山是比良獅子谷

林間恰好縛柴門

南溪泉美煎茶馥

北苑薇肥打菜尊

西嶺中空無動相

東江分地遠譚誼

十年求隱今初得

此處扶桑第一番

ひらさんししこく  
比良山獅子谷の居

山は是れ比良の獅子谷

林間恰好も好し 柴門を縛するに

南溪泉美にして茶を煎じて馥しく

北苑薇肥えて菜を打して尊し

西嶺 空に中つて動相無く

東江 地を分ちて譚誼遠し

十年 隠を求めて今初めて得たり

此の処 扶桑の第一番

当地が山居するのに相応しい土地柄であり、良水で煮た馥郁たる茶の香り、実りある畑、山と湖岸に接する居処には心を惑わす動きもなく俗世の騒がしさからも遠く、十年來求めてきた隠棲生活を営むのに理想の地である、と詠む。巻頭詩に詠まれる隠棲の地として優れていること、幽居生活の充実、風致の静けさもしくは美しさは当該詩

作に繰り返し表現されており、右記の詩は一連の詩作の方向性を示すものでもある。

其二

心已俗兮身亦俗

世間爲樂世間家

折腰隣舍力彌強

馳慮遠方情轉加

錢有愚尊於道背

金無賢謾與天差

山庵不用多般事

終日鋤雲種紫茄

其の二

心已に俗なれば身も亦た俗

世間を樂と爲す世間の家

腰を隣舍に折つて力 弥強く

慮を遠方に馳するに情 轉た加う

錢有れば愚なれども尊ぶ 道に於いて背く

金無ければ賢なれども謾らる 天と差う

山庵には用いず 多般の事

終日 雲を鋤きて紫茄を種う

第六句までは俗世間のありようを描くが、頸聯は金銭の有無によつて賢愚が転倒することを憂える。もちろんこうした世間の価値観は山居に関係せず、黙々と耕作に励むようすが詠まれる。金銭に代表される世俗の価値を避け、することは庵住する僧にとつて一つの理想であつたろう。俗と対比することでそれとは無縁の自己の様相を耕作に託して表わしている。山居生活を賦した作をもう一例見てみたい。

其十六

其の十六

罵雨打風世連違

雨を罵り風を打し世に連なつて違え

寓身無地始營扉

身を寓するに地無うして始めて扉を営む

收薪後嶺吟詩下

薪を後嶺に収め詩を吟じて下り

乞米前村唱偈歸

米を前村に乞いて偈を唱えて歸る

臨澗汲泉憐石瘦

澗に臨み泉を汲んで石瘦を憐れみ

涉園擇菜喜薇肥

園に涉り菜を擇んで薇の肥たることを喜ぶ

是非強作吾生得

是非強いて作るに非ず 吾れ生を得たり

誤莫客來容是非

誤つて客來つて是非を容るる莫れ

頷聯の薪を樵り、詩を嘯きながら山を下り、米を前方の村に乞い偈を口にして歸るとするのは僧・詩人としての自己の姿が歌われている。頸聯では溪水を汲み、耕地の実りを喜ぶが、尾聯で山居の恵みを得て生を保つ生活に自足し、客―外部者―が訪問し是非―正・誤―の基準を持ち込むことを峻拒する。山居の自足・当否を問わない生活を歌つていよう。

次に宗教的境位を含む詩について触れたい。月坡は当該詩集に禅宗の教義に基づく詩を歌っているが、当該詩作にもそれが表わされている。

其十

其の十

一間茆屋足容躬  
人世何思瓊室宮  
洗鼎通宵烹月食  
携籃終日盛風充  
杖頭霜爛倚無力  
榻角雲埋禪有功  
昔不曾迷今不悟  
是心是佛是皆空

一間の茆屋 躬を容るるに足る  
人世 何ぞ思はん 室宮を瓊することを  
鼎を洗つて通宵月を烹て食らい  
籃を携えて終日風を盛つて充たしむ  
杖頭 霜に爛れて倚るに力無く  
榻角 雲に埋めて禪に功有り  
昔曾て迷わず 今悟らず  
是れ心 是れ仏 是れ皆空

世に居住するにはこの粗末な庵で十分であり、奢侈を尽くした家は必要でないとする。鼎の中に映る月を食し、籃に風を満たすという表現は転倒した表現だが、一日の無事を表わしたものである。杖先は霜に爛れ使えず、腰掛けには雲がかかり静謐の中で禪定すると詠む。往昔も迷うことなく、現在も悟りに至らないのは迷・悟がそもそも存しないからであり、これが本性の心であり仏心であり、すべては「空」であると詠じる。頸聯以下に禪的境地が窺われる。

其九

其の九

越格平生何不寶  
越格の平生 何れか宝ならざらん



就中最貴是清閑

能知離市市爲市

又悟入山山匪山

拾菓年年當飯活

嗜茶夜夜汲泉還

一庵消息無人會

啓告虛空獨破顔

中に就いて最も貴きは是れ清閑

能く市を離れて市の市たることを知る

又山に入つて山の山に匪ざるを悟る

菓を拾ひ年年飯に當てて活き

茶を嗜んで夜夜泉を汲んで還る

一庵の消息 人の会する無し

虚空に啓告して独り破顔す

日常は宝—仏—そのものであり、その中でも清閑を第一とした出世間の妙味を嘆賞する。市を離れて始めて市の本体を知り、山に足を踏み入れて初めて山が山でないことを会得するとあるが、これは道元の「山水経」（『正法眼蔵』第二十九）にも通じる認識であり、一般的概念としての山ではなく、山そのものが仏の現成であるとする、曹洞禅の本質としての山をいうのであろう。果実を喰らい、茶を飲み毎夜泉の水を汲むとするが、幽居の充実を表現する。庵居のありようは人と会うこともなく、すべての事象を抱容する無礙の空界に「啓告」するのに独り「破顔」—こり—すると詠む。「破顔」の語は「破顔微笑」が禅語としてよく知られているが、「啓告」虚空の語は『碧巖録』第一則の著語に「望空啓告（空を望いで啓告う）」とあり、これに拠るかとも思われるが、虚空—真如—に破顔する趣向は禅的要素を強く感じる。

其二十三

其の二十三

一鉢一瓶何所祈

一鉢 一瓶 何の祈る所ぞ

清泉當渴芋當饑

清泉は渴に當て芋は饑に當つ

解冠退歩知今是

冠を解いて歩を退けて知んぬ 今の是なることを

懷鏡求頭憶昨非

鏡に懷いて頭を求めて憶へば昨の非なることを

念起常障迷與悟

念起こつては常に迷と悟とに障らん

理窮寧患讚兼譏

理窮まりては寧ろ讚と譏とを患えんや

無端贏得出家事

端無く贏け得たり 出家の事

坐見煙雲膝下飛

坐しては見見る 煙雲の膝下より飛ぶことを

人に頼ることなく食を自然に求め、世間から離れ内心を希求する日々が正しく、それ以前のあり方は正しくなかつたとする。心の働きは相対的なものであり、論理が行き着くところに誉・誹が生じて愁えるともする。思いがけなく出家することができ、自適の境涯であることを詠じる。少しく理念的な詩作だが、出世間の歎びを歌っており、山居での生活の酬いが表現されている。

其二十四

其の二十四

昨日般般今日夢

昨日の般般 今日ば夢

推知百歳亦如斯

推して知る 百歳も亦た斯くのごときを

富餘千口未堪樂

貧歎一脣寧可悲

壽夭係天求奈致

智癡有命願非爲

個中消息唯無事

坐臥經行不更疑

富んで千口に余るも未だ樂しみに堪えず

貧して一脣寧らず 寧ろ悲しむべけんや

寿夭は天に係わる 求めて奈ぞ致さん

知癡は命に有り 願わくは爲るに非ざらんことを

個の中の消息 唯だ無事

坐臥 經行 更に疑わず

過ぎ行く日々のあるいは百年後も同様であろう、富裕で美食を尽くすことは正真の楽しみではなく、貧窮して食の乏しいのは悲嘆することではない、と清貧を歌う。寿命の長・天、性質の智・癡は人爲に関わらず、仏の要諦は余計なはからいのない、ありのままの境地であり、いかなるときも「坐臥經行」―禪定―であることを疑わない、と詠じるのは確固とした修行への信念が見てとれる。「經行」は道元の『宝慶記』に説かれており、歩行による行禪のことである。⑩ 日常の起居そのものが禪定の実践とする自宗の教義は山居生活においても営まれるべきものであった。

このように山居のありよう、風致を歌うとともに宗教的境地も詠じられており、一連の詩作は詩人であり禪僧としての月坡の出発点となるものであろう。山居への憧憬に関して

堪笑臨江懷石者

山中真趣不曾知

笑うに堪えたり 江に臨んで石を懐く者の

山中の真趣 曾て知らざることを (其六)

久願幽棲恬淡奇

久しく幽棲恬淡の奇なるを願う

縛茆又悔十年遲

茆を縛して又悔やむ 十年の遅きことを（其十四）

とも詠まれており、当期の獅子谷寓居は月坡にとつて詩作の上で、「無可有郷」であつた。

なお当該詩作の特徴として耕作を表わす句が多いことが挙げられる。前掲詩「其二」に「終日鋤雲種紫茆」の句があつたが、これ以外について見ると、

種麥栽麻衣食有

麦を種え麻を栽えて衣食有り

饅頭邊事不吾瞞

饅頭辺の事 吾を瞞かず（其八）

山翁唯欲種黃獨

山翁は唯だ黄獨を種えんと欲して

日把鉏雲鈍鐵錐

日に雲を鉏く鈍鉄錐を把る（其十七）

高低隨處平泥去

高低 処に随つて泥を平らげ去つて

數畝新開作麥田

數畝 新に開いて麦田を作す（其二十二）

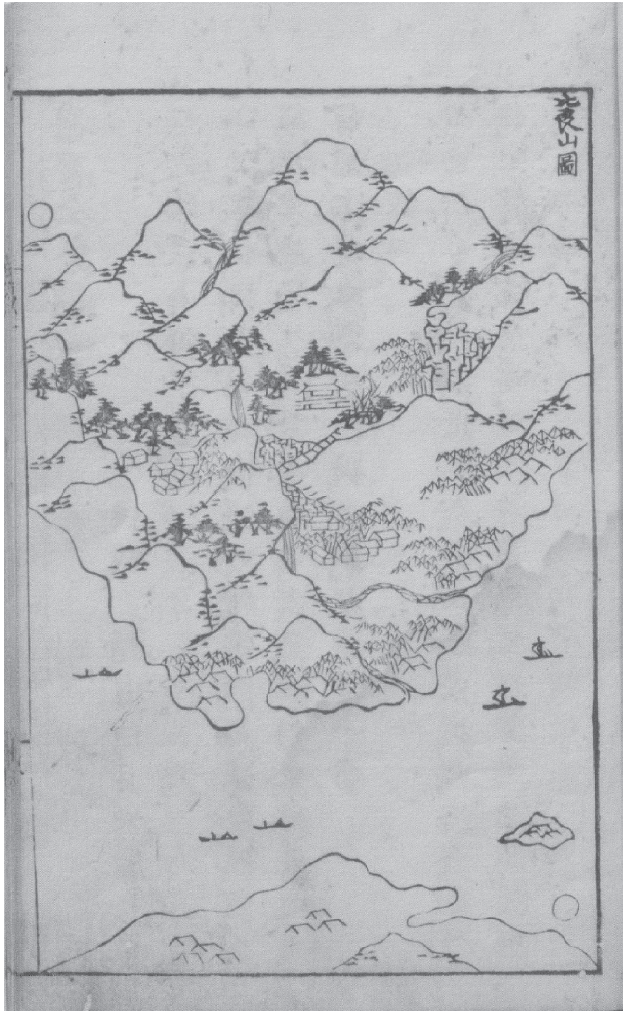
留葉作金非實事

葉を留めて金と作すは實事に非ず

種田搏飯豈虛然

田を種えて飯に搏る 豈に虚然ならんや（其二十八）

という各聯を検することができる。禅院では作務が義務でありまた尊ばれており、耕作もその一環だが、月坡は自身の耕作を山居における作務として捉えていたのではないかと思われる。食を得るための現実的な行為ということもあつたろうが、耕作への熱意は詩作の上では山居の自立した生活、労働への熱意を示しているのではないか。一



(『菴居全集』「比良山図」3才)

例目は特に耕作に対して信憑する心情が表現されている。このことは俗世間を避け風致を愛するのみの山居ではなく、実態を伴った生活感覚の要素を与えている。

## 二 「題獅子庵八境」

月坡は獅子谷庵住時代（寛文四年～同七年）にもう一例、連作詩を詠じている。「題獅子庵八境（獅子庵の八境に題す）」（上巻）がそれである。前項の「比良山獅子谷居」には各詩に題は付されていないが、当該詩では自ら選定・命名を行っている。このうち四題は仏教語に由来するものであり、二題は名勝、二題は村名である。

### 無露頂

### 無露頂

帶霧人雲浮逼然

霧を帯び雲に入つて浮逼然たり

未看頂相在那辺

未だ看す頂相的那辺に在ることを

向言斫額莫勞眼

向かつて言う斫額の眼を勞する莫れと

卓透直須天外天

卓透は直ちに須らく天外の天なるべし

「無露」はおそらく「無漏」に通じ、清浄の境地の言いであろう。「頂相」はのぞき見ることのできない崇高な如来の頭頂部をいうが、頂きを如来のそれに見立てている。手をかざして頂きがどこにあるかを見ようとしても無駄であり、卓立する頂きは天を突き抜けているのであろうと詠む。山の頂きを如来の頂相に託して表わしており、比

良山の清澄の姿が如来に重ね合わされる。

仏座峰

躑躅華開百億春

峰高千丈紫金身

誰知一座天真佛

不用離鑄瞻仰新

仏座峰

躑躅華開く 百億の春

峰は高し 千丈の紫金身

誰か知る 一座の天真佛

離鑄を用いず 瞻仰の新なることを

「百億」は広大無辺の世界を意味するが、躑躅の花が咲く景に全世界の春を感じ取る。峰の高さに仏の崇高の渾身を写し出し、「天真仏」—ありのままの自己—を現出する。人為の及ばない景趣に嗟嘆を新たにすると詠む。「天真仏」の語は永嘉真覺『証道歌』に「覺即了 無一物 本源自性天真仏 覺れば即ち了ず 一物無し 本源自性は天真仏」とあり、本来の自性をいう。この語から禅的な色合いが窺われ、人々すべてが具有する自性は仏性であるとするとする禅の教理が浮かび上がる。

紫雲嶺

嶺頭日没影氣氤

方見白雲成紫雲

望眼力窮天漸暗

紫雲嶺

嶺頭日没して影氣氤

方に見る 白雲の紫雲と成らんことを

望眼力窮まつて天漸く暗し

色空初了本無分

色空初了す 本分つ無し

夕暮れどきの間の光景に仏教教理を投影して詠む。「紫雲」「色空」と仏教語を用い、夕陽に照らし出された雲が紫雲に化し、その情景を見晴らかしているとあたりは闇に包まれ、色―現象―と空―無自生―の区別がないことを初めて分かったとする。昼夜のはざまの光りと闇に仏教教理が反映されており、一連の詩作の中でも宗教的境位が強く表現されている。

法華灘

法華灘

無説無言眞法華

無説 無言 眞の法華

如何開口事誼譚

如何ぞ口を開いて誼譚を事とせん

見聞須是實諸相

見聞 須らく是れ諸相を実すべし

誤向灘邊莫筭沙

誤つて灘辺に向かつて沙を筭うる莫れ

谷川の瀬を「灘」とし法華経を称揚する。「無説無言」は「無説無示」とも言い換えられようが言葉では示されない法華の真髓を讃仰し、とやかに言い立てることは無用であるとする。「見聞」―六識―は種々相を究明すべきであり、谷川の砂を数えるような無駄なこと営むな、とする。法華経は宗門において重要視されており、道元『正法眼蔵』（六〇巻本・九十五巻本）に「法華転法華」の巻も存するが、当該詩は題の「灘」以外山中の景は詠まれておらず、経典を讃仰することに趣意があり、一連の詩作では特異である。



櫻桃溪

櫻桃溪  
おうとうけい

甚愛櫻桃遠隔塵

甚た愛す 櫻桃の遠く塵を隔つることを

特來親見別天春

特に來たつて親しく別天の春を見る

莫令華落溪源水

華をして溪源の水に落とさしむること莫れ

只恐流香誘客賓

只だ恐る 流香の客賓を誘わんことを

当該詩は全八首のうち最も風致を讚えた趣向であり、命名も仏教色から離れる。俗塵から遠く離れた山中の桜桃花を愛で、桃源の世界の春に浸ると詠み、花の散ることを危惧し、芳香が流れ出て世間の人を当地に誘うことを危ぶむ。山中の清澄の風致に咲く花を賞美し、他者の來訪により別天地の風趣が乱されることを忌む。一連の詠作の中で当地の風致を愛する心情が強く表れているといえよう。

瀑布泉

瀑布泉  
ばくふせん

透石穿雲落碧空

石を透り雲を穿つて碧空より落つ

爲霖爲雨氣濛濛

霖と爲り雨と爲つて氣濛濛たり

何年參得馬師喝

何れの年か參得す 馬師の喝

巖舌吼雷令我聾

巖舌雷を吼じて我をして聾せしむ

「瀑布」は当地の楊梅の滝（ヤケ山）を指す。起句・承句は右上を激しく流れ、雲を貫いて空から落ちてくるよう

に見え、霧や雨と化して降りそそぐ滝の情景を詠む。転句・結句では一転して馬祖道一の故事を引き、いつになったら参禅して真理を体得するのであろうか、このことを思うと滝の轟音が雷のように聞こえ、あの馬祖の喝のように自分の聴覚を奪うとする。この馬祖の故事は『景德伝灯録』などに見え、百丈懷海が馬祖に一喝されて三日間耳が聞こえなかったことをいう。<sup>(12)</sup> 滝の轟音を馬祖の喝の声に聞きなしたものであり、禅風が強く感じられる。また馬祖の喝の故事を引くことは自らの禅修行を励ます意図もあつたのではないかとも思われる。

栗原村

栗原村

七十餘家側岸向

七十餘家 岸向に側つ

石泉哽落水如歌

石泉哽ひ落ちて水歌うがごとし

獨藏身世太雖好

ひとり身世を蔵して太だ好むと雖も

其奈林間栗棘多

其れ奈せん 林間に栗棘の多きことを

第七首・八首は実在の村名を題にする。月坡が庵住する近郊の村を詠じるが、村落の立地のありよう、岩清水が滞りながら流れる音に耳を傾け、身を山に隠して楽しんでるが、この地の林に栗が多く棘に煩うことはどうしようもない、と詠じる。結句「栗棘」は栗原村の「栗」に因んで詠まれているが、隠棲の中にも不如意なことがあるとする。その不如意とは人為がもたらすものではなく、自然物であるところに自足の境涯が詠まれているのであろう。

龍華村

龍華村りゅうげむら

松岡竹潤色如藍

松岡しょうこう 竹潤ちくくかん 色藍あゐのごとし

茆屋高底一三三

茆屋ぼうおく 高底たかそこ 一三三いちにさん

知在當來慈氏會

知んぬ 當來どうらい慈氏じしの會えに在ることを

龍華村外使吾庵

龍華村外りゅうげそんがい 吾われをして庵いおりせしむ

松の生える丘、竹の生え沿う谷川が藍色に包まれ、粗末な家が高い、低い所に数軒点在する景を詠む。遠い未来には弥勒菩薩の衆生を救う説法があり、そのため龍華村郊外に庵住することになった、とする。「慈氏會」は「竜華三會」のことであり、釈迦の入滅後五十六億七〇〇〇万年後、弥勒菩薩が兜率天から下生して竜樹の下で開悟し、人々を救済するために説法を三回行う法座のことをいう。前記の詩と同じく村名から詩中に詠む言葉を導きだす。手法としては同一だが、当該詩は弥勒菩薩に因む村名のため、自身が当地に庵住する理由と関係させて詠じている。

以上「獅子庵八境」の詩作を見た。「比良山獅子谷居」では宗教的境位を表現する際、自身の山居でのありようととも詠まれたものが多く、特に禅的要素を表現していたが、当該詩作では馬師の喝の故事を引用するものの、全体としては一般に周知の仏教に関する知見をもとに表現されている。なお「桜桃溪」は当地の景勝を愛する月坡の心情がよく窺えよう。

### 三 「関山琵琶苑居」

寛文七年（一六六七）、月坡は郡長より退去を命ぜられて獅子谷を去る。一善信の勧めにより関山（逢坂山）の蟬丸旧址に庵を結び二回目の山居生活を送る。<sup>(13)</sup>獅子谷を離れる際の詩を見ておこう。

#### 離獅子谷

獅子谷を離る

小隠居山大隠廓

小隠は山に居し大隠は廓

何虚石上學磨輓

何ぞ虚しく石上に磨輓を学ばん

三年伐木鋏頭鐵

三年木を伐る鋏頭の鉄

賣作草鞋行脚錢

売つて草鞋行脚の錢と作さん（菴居全集 上巻）

『文選』の王康琚「反招隱詩」、南岳懷讓の「磨輓」の故事を引き、鋏の鉄を売つて路銀にあてると詠む。三年に及ぶ獅子谷での山居は前項で見たとように二種の佳境詠には禪僧としての本懐、詩人として風致を愛する心情が表現され、詩僧としての月坡の骨格が形成されていた。本項では関山山居時代の佳境詠について見たいが、「関山琵琶苑居」（中巻）、「題琵琶堂六境」（同上）の二種の詩作が存する。<sup>(14)</sup>共通する「琵琶」は当地に庵住した蟬丸が琵琶の名手であったことに因むが、前者は勝地の選定・命名は行われておらず、後者はそれがなされている。前者の詩作は全十首からなるが、「其二」は旧稿（本紀要二十二号）において引用したことがあるので本稿ではそれ以外の詩について見たい。

關山琵琶苑居

関山琵琶苑の居

素愛山居隣市廛

素より山居の市廛に隣るを愛す

一茆恰好縛中邊

一茆恰も好し 中辺に縛す

從來非有別消息

從來 別の消息有るに非ず

乞米收薪意自便

米を乞い薪を収めて意自便す

琵琶苑における円満自足の生活を詠じる。山居の近くに街中があつても苦にならず、粗末な庵を山の中腹に結び、以前から別の暮らしがあるわけでなく、托鉢し薪を樵る日々の営みは思ふままの境涯であるとする。一連の詩作の基調をなすものであり、新たな山居が自らに適うものであつたことを示す。

其三

其の三

徹底休時徹底休

徹底休するとき徹底休す

渾身客盡小堂幽

渾身 客尽きて小堂幽なり

十年參得活埋話

十年參得す 活埋の話

何管秋風霜我頭

何ぞ管せん 秋風の我が頭を霜することを

「徹底」「活埋」という禪語を用いて詠む。「徹底」は悟りきること、「活埋」という語は『臨濟録』にも見えるが、ここは通幻寂霊が僧堂の前に坑を堀り新參の学人に問答を試みて不適の場合は坑に落とすという接化法のことをい

うか。承句の「客」は主体に対する外界の対象のことだが、思慮分別の働く対象がなくなることは禅僧として目指すべき境地であり、小庵で独り参禅に沈潜する姿が表われている。

其四

止動乖真動止差

其の四  
動を止むれば真に乖き止を動ずれば差う

非思量處衲僧家

非思量の処衲僧の家

坐來初覺苑中可

坐來 初めて覺ゆ 苑中の可きことを

不是山閑不市譚

是れ山の閑なるにあらず 市の譚きにあらず

起句は「止動」「動止」から生じる心の迷いの状況を詠むが、『信心銘』に「心動歸止 止更彌動 唯滯兩辺 寧知一種（心動いて止に歸すれば 止更に彌動す 唯だ兩辺に滯る 寧ぞ一種を知らんや）」とある。動を収めて止に就こうとしてもかえって静がますます動じてしまうとし、動・静に固執することを諫めるが、禅家にとって心の動静は喫緊の問題であり、またそこから離れることも重要であったに違いない。承句では「非思量」という語を用い、とらわれを捨て無分別の境地を目指すべきとする。転・結句では当苑がすばらしいのは山が静かでも街が喧騒であるためでなく、「非思量」のためであるとする。この詩は特に禅僧としての心中の理想が表現されている。

其六

計度無心境自空

其の六  
計度 無心にして境自ずから空

愛山好市一家風

山を愛し市を好む 一家風いっかふう

堂前朝暮何年盡

堂前 朝暮 何れの年か尽ちやうぼ いす どのねんかじん

日落西兮月上東

日西に落つれば月東に上ひのしにおちればつきあが

「計度」は考え分別すること。「無心」は妄念がないことをいうが、考え分別する境涯を去ると「空」の状態であるとし、静寂の山、喧騒の街を一如として見るのが禪家であるとす。山居の日々が過ぎ行き、太陽が西に沈めば東から月が出ると詠じ、天体の運行に日々のあるを託す。禪教理を詠じながら山居の円満が表わされているのであろう。

其七

俗是俗兮僧是僧

俗は是れ俗 僧は是れ僧

更無言句為人膺

更に言句げんくの人の為ために膺こたうること無し

松風吹送關山頂

松風吹しょうふうき送くる関山かんざんの頂いただき

獨對茆堂夜雨燈

ひとりひとり茆堂ぼうどう夜雨やうの灯ともしびに対す

其の七

承句の言葉が人の問いかけに応じることはないとするのは、言葉の表層的意味にとらわれることを忌む禪の教理が表現される。関山の頂上に松風が吹き、雨の降る夜独り庵で灯火に向き合う姿は、言葉を離れた実相が表現されている。 「松風」「雨」という自然現象に包まれながら「灯」に照らし出される作者の内面には言葉は必要あるまい。

其の八

在處為家一道人

在處ざいしょを家と為すいぢぢじん一道人

豈論清淨與埃塵

豈あに清淨じんあいと埃塵じんあいとを論ぜんや

默然閑坐蘿窓下

默然もくぜんとして閑坐かんざす 蘿窓らそうの下もと

山色市聲心轉新

山色さんしき 市聲しせい 心転うんたた新あらたなり

其の九

其九

休論無法及無心

無法むぼう及び無心むしんを論ずることを休やめよ

山自層層水自深

山おのは自おのずから層層そうそう 水おのは自おのずから深しん

晬近閑遊超物外

晬あかつき近ちかうして閑遊かんゆう物外ぶつがいに超こえる

一輪月色孰知音

一輪いちりんの月色げつしよく孰たれか知音ちいん

其の九

「無法」「無心」という禅教理に深く関係する語を詠み、どちらの教相も論究することをやめよという。「無法」は『新版禅学大辞典』（駒沢大学内禅学大辞典編纂所編、大修館書店）に「無法は空の意。」（「無法法」の項目）とあり、



「無心」は同書に「無心定の意で、一切の意識作用を滅した状態」とある。この二つの教相から離れた境地が承句であり、自然の中に自ずと存する山、水のありようとして表現される。転・結句では夜明け前の情景が表わされ、世間を超越した別天地で自適に遊び、空にかかる月を心の通う友とすると詠じる。起句で禅教理を掲げ、承句ではその境地を自然に託して表わし、転句以下で自身の思いを詠む構成は、一連の詩作の中でも禅機が巧みに表現されているといえるだろう。

其十

不問透關非透關

透關とうかん 非透關ひとうせきを問わず

教人等見屋頭山

人ひとをして等しく屋頭おくとうの山を見せしむ

由來折脚踏邊事

由來ゆらい 折脚せつきゃく 踏邊たつへんの事こと

煨芋煎茶香熟寒

煨芋わいいう 煎茶せんちや 香熟かおりにじゆくして寒さむし

「透關」は修行者が関門を透過することであり、「関」は禅家が透過すべき難関、あるいは悟りの門を意味し、禅籍に見られる語である。同時に「関」は逢坂関を意味すると思われ、透過すべき関門を透過する、しない（逢坂関を通過する、しない）に関わらず、人は平等に山を見るとする。透過の有無に関係なく旅人―衆生―が同じ光景を見るところに平等心を表現していると思われる。転句以下は視点が卑近なものに移り、足が折れた鍋でじっくりと煮る芋、茶を煎じる馥郁とした香りを味わうとする。一連の詩作を終えるにあたり、最後は庵住のありようを示して自足する心情を表現する。前項の「題獅子庵八境」にも仏教的要素が詠まれていたものの「竜華三会」「馬師の喝」

のような周知の仏教に関する知見だったが、当該詩作では自身の宗教的境位が山居のありようととも歌われており、特に禅教理を表現したものが多かった。「其九」はその代表であろう。詩作における禅的境位を一步すすめているといえよう。



（『菴居全集』「関山図」15才）

#### 四 「題琵琶堂六境」

関山山居時代のもう一例の佳境詠である「題琵琶堂六境（琵琶堂の六境に題す）」を見たい。『菴居全集』では上記の題だが、『月坡禅師禅偈清吟』には「丁未の秋、独和禅人南禅より来つて師を訪う。次の日相率いて苑中に遊び和して六境を選んで詩を言う。師亦た題詠を留めて樂しむ」（原漢文）とあり、南禅寺の僧独和（未詳）が月坡を訪れ、琵琶苑に遊び六境を選定して詩を詠み、月坡も同じく詩を詠じたとある。<sup>16)</sup> 第一首から見えていく。

##### 慈光春晩

慈光じこうの春晩しゅんぱん

一輪いちりん照てう日發じつはつ慈光じこう

一輪いちりんの照てう日じつ 慈光じこうを發はつす

徧界へんがい圓えん通つう恩おん没ぼつ量りやう

徧界へんがいに円えん通つうして恩おん量りやうり没なし

瓊殿けいでん東とう開かい春しゅん晚わん煖あたたか

瓊殿けいでん東とうに開あいて春しゅん晚わん煖あたたかかなり

鳥啼きょう華け笑しょう興きょう彌い長ちやう

鳥啼きょう華け笑しょうつて興きょう彌い長ちやうし

万物を育む春の太陽の光りを仏、菩薩の放つ慈悲の光りに譬える。その光りはあらゆる所に行き渡り、もたらされる恵みは計り知れないとし、春の暮れ方の陽光に仏、菩薩の慈しみの心を投影する。結句は歐陽修「豊楽亭遊春詩」（其一）に因む禅語「鳥歌花舞」を思い起こすが、鳥が囀り花が咲くという春爛漫の景に浸る心情が表現されている。琵琶苑の春の情景を「慈光」「徧界」「円通」という語を用いて仏、菩薩を賛嘆しながら春興の尽きないありようを歌う。

湖上梵音

湖上の梵音

翻眸海北鏡光恢

眸を海北に翻せば鏡光恢たり

一 百里程當面開

一 百里程 當面開く

濤震梵音清耳底

濤 梵音を震つて耳底に清し

誰於聞處入流來

誰か聞處に於いて流れを入れ來たる

琵琶湖の波の音を仏の妙なる音声に聞きなす。湖面は鏡の光りのように透き通りどこまでも広がる景を目前にし、波の音は仏の妙なる音声のように聞こえて耳に清らかであり、当苑で聞くことの不思議さを思う。当該詩作において琵琶湖を景物として取り上げた唯一の詩であり、前詩と同様に仏への賛嘆とともに詠まれる。

關山月色

關山の月色

西没速兮東上遲

西に没するは速やかにして東に上るは遅し

關山月色弄尤奇

關山の月色 弄ぶこと尤も奇なり

閑遊物外樂無盡

閑遊 物外 樂しみ尽くること無し

這裏風流誰得知

この裏の風流 誰か知ることを得ん

関山に上る月を賞揚し、当地での風流に浸る心情を表現する。月の入りのはやさや愁え、月の出の待ち遠しく思う心に関山の月のすばらしさを言い表わす。「閑遊」「物外」の語は前掲の詩に転句「晝近閑遊超物外」（関山琵琶

苑居「其九」ともあつたが、別天地でののどかな行楽の歎びは尽きることなく、当地の風流は俗を脱し閑居する者でなければ誰も知ることはできないとする。一連の詩作の中で当地の「風流」を強く読者に印象付ける。

調絃松風

調絃の松風

一種没絃丁夜鳴

一種没絃 夜に丁つて鳴る

必斯風雨入松聲

必斯風雨の松に入る声ならん

蒲團坐久茆堂靜

蒲團坐ること久しうして茆堂靜かなり

耳聽何如心聽清

耳聽は如何心聽の清きに

「没絃」は弦のない琴、あるいは弦のない琴の音を心中で味わうことであり、禪語に「没絃琴」の語がある。無弦の琴が夜になって山中に響いているが、これはきつと雨まじりの風が松の枝に吹き通う声なのであろうとし、ひっそりとした粗末な堂で坐禅するようすを詠む。結句は虚堂智愚「聽雪」の転句「耳聞不似心聞好（耳聞は心聞の好きには似かず）」（『江湖風月集』）と通底する。「心聽」——心で見るとの肝要さを歌うが、当該詩は「没絃」の禪語、「蒲團」「坐」の坐禅を表わす語、「心聽」の肝要という禪的要素から成り立つといえよう。

草錫清泉

草錫の清泉

試來卓錫水連天

試みに来たつて錫を卓てれば水天に連ぬ

非是神通非本然

是れ神通に非ず 本然に非ず

井底任他千尺遠

せいぞこ 任他 にんた 千尺遠し

寸繩無用汲深泉

すんじょう 寸繩 用いること無うして深泉を汲む

「清泉」は逢坂関所にあつたという関の清水をいうのだろう。歌枕であり「関の清水」「岩清水」と詠まれることが多い。関山の名所を主題にするが、錫をたてると水が湧き出すことは弘法水の伝説を思い起こす。当地の清水が豊富に湧き出し、泉の底は果てしなく深く、滾々と湧き出る水は汲むための繩など必要とせず槩々と掬い取る、と詠む。当該歌枕の和歌の表現のありようとは関係しないが、詩人の立場から改めて詠じたものである。

門巷絡繹

もんちやう 門巷の絡繹

堂前絡繹往來誼

堂前 絡繹として往來誼し

牛過窓櫺人過門

牛は窓櫺を過ぎ人は門を過ぐ

直透長安牆外巷

直ちに長安に透る牆外の巷

何將大道更為論

何ぞ大道を將つて更に論することを為さん

「門巷」は門の前、「絡繹」は人馬などの往来が連なり続くことであるが、関山は実際、東海・東山道の交通の要衝でもあつたから往来は激しかつたであろう。詩の趣意は『趙州録』の「大道通長安（大道長安に通る）」（第三三五則）に拠る。趙州從諗が弟子の「道とは何か」の問いに対して、「師云、牆外底。云、不問者箇。師云、問什麼道。云、大道。師云、大道通長安。」（師云く、「牆外底。」云く、「者箇を問わず。」師云く、「什麼の道をか問う。」

云く、「大道。」師云く、「大道は長安に通ず。」と答えている。<sup>(18)</sup> すべての大道は都の長安に通じるとは、日常の起居臥座という行為すべてが「長安」——悟り——に通じていることをいう。小堂の前は行き来の喧騒に包まれ、牛は窓の格子を、人は門——関——を通り過ぎると通行のようすを言い表わすが、「牛過窓櫺」は『無門関』第三十八則にある五祖法演の公案に拠る語である。<sup>(19)</sup> 「長安」はここでは京のことでありまた「悟り」を表わし、悟りに到る路はすぐ近くにあるのだから、ことさら論じる必要はないとする。当該詩は往來の喧騒の中に悟りへの道を詠じたものであり、『趙州録』『無門関』に拠りながらそれを表現しようとする。禅籍に拠りながら庵前の光景から悟りへの道を歌うことは詩人・禅僧としての本性が表れており、一連の詩作を終えるに相応しい。

## おわりに

以上、月坡の四種の佳境詠について見た。獅子谷、琵琶苑における詩作は山居においてなされたものであり、世俗から離れた一禅僧として詠じたものであった。各詩の趣意は多岐にわたっていたが、風致を賞美するだけに止まらず、禅僧としての内省、山居生活のありようとそれに自足する心などが表わされていた。禅的境位を表現した詩作や禅籍に拠って詠まれたものもあり、そこには月坡の宗教的境位が見てとれる。純一に風致を賞美する詩は風雅を愛する心の表われであり、その景物と一体となり、または想起されて表現される仏教教理は禅僧としての月坡の内面を映し出している。詩人・禅僧としての月坡は一心同体であり、佳境における詩作はその両者の交響のもとになされたと思われるのである。なお前記のように月坡には佳境詠に関連するものとして四種の境致詠が存する。本稿では境致詠にまで触れることができなかった。別稿において取り上げることにはしたい。

注

(1) 岡田宜法『日本禅籍史論（上）曹洞禅編』（井田書店、一九四三年）

(2) 参照した資料を掲出する。すべて駒澤大学図書館所蔵本による。

〈語録〉

『月坡禅師行実』（『月坡禅師住加賀州金龍山天徳禅院語録』二卷二冊。天和二年刊）

『月坡禅師住加賀州黄龍山猷珠禅寺語録』二卷二冊。延宝五年刊。

『月坡禅師住常陸州岱宗山天徳禅寺語録』四卷二冊。延宝八年刊。

〈詩集〉

『菴居全集』三卷一冊。寛文十二年刊。

『月坡禅師禅偈清吟』二卷一冊。延宝九年刊。

『靈隠図詩』一冊。元禄五年序刊。

『南去北来』三卷一冊。元禄十五年跋刊。

〈紀行〉

『手ごとの花』一冊。

(3) 『月坡禅師住常陸州岱宗山天徳禅寺語録』第三卷に六首を賦す（老杉関・望州巖・卓錫泉・縦眸園・聴雨林・翫月溪）。

この時四十一歳。

(4) 月坡の境致詠は「題黄龍山猷珠禅寺四境」（『菴居全集』）、「遊題青龍寺題四境」（同上）、「登吉祥山題十一境弁引」（『菴

居全集』）、「靈隠図詩」が挙げられる。この内『靈隠図詩』は山科の古代廢寺、大宅寺を復興し「中興靈隠山大宅禅寺」とし、



二十八境四十二景を選定・命名したものであるが、実際の太極寺は一字の堂であった(『都名所図会』巻五)。巻頭に月坡の手になる絵には壮大な伽藍が描かれているが、これは月坡が仮構したものであり、実は虚構の寺院の境致である。通常の境致詠とは異なっており、別稿で問題にしたい。

(5) 境致については玉村竹二氏の「境致とは、境内の面目を惹くやうな木石水流亭榭樓閣橋梁等のうち、先述の如き、禅宗一流の態度で命名を施されたものをいふので、多くは一定数を限って定められ、殊に十境といはれるものが多い。」(『禅院の境致―特に楼閣・廊橋について―』(『叢書 禅と日本文化5 禅と建築・庭園』ペリかん社、二〇〇二年)との見解に従いたい。なお境致といえば臨濟寺院を想起するが、曹洞寺院にも存することを蔡敦達氏が指摘する(『日本の禅院における中国的要素の摂取―十境を中心として』(『日本研究』23集、国際日本文化研究センター)。

(6) 『月坡禅師禅偈清吟』の題詞を引用しておく。「寛文甲辰四年春二月、師独り行化して江左道中を過ぐ。栗原村の居民數十人力を協せて師の道風を迎う。遂に比良山獅子原に就いて庵を卓して留隠せしむ。師素より儉閑の地を求めり。乃ち欣然として住す。因つて三十五偈を説いて志を表わす」(原漢文)。駒澤大学図書館所蔵本(請求記号、H152.1/W2)。

(7) 駒澤大学図書館蔵『菴居全集』(請求記号、永久文庫1055)による。以下同。

(8) 菅沼晃編『道元辞典』(東京堂出版、一九七七年)には「道元によれば、山は山として、水は水としての、それぞれのありかたで、そのものに徹し、山は山になりきり、水は水になりきっている。それは、あらゆる時をこえた山水として実現(現成)しているのである。」(山水経)とする。

(9) 入矢義高・溝口雄三・末木文美士・伊藤文生訳注『碧巖録(上)』(岩波文庫)

(10) 『宝慶記』に「堂頭和尚示して云く。坐禅より起ちて経行せんきんぎんと欲せば、遶歩にょうぽすることを得えされ。直に須じきく直歩じきほすべし。」

(伊藤秀憲・東隆真訳注『道元禅師全集第十六巻 宝慶記 正法眼蔵随聞記』春秋社、二〇〇三年)とある。

- (11) 梶谷宗念・柳田聖山・辻村公二『禪の語録16信心銘・証道歌・十牛図・坐禅儀』（筑摩書房、一九七四年）
- (12) 『景德伝灯録』に「一日、師、衆に謂ひて曰く。仏法は是れ小事にあらず、老僧、昔、再び馬大師の一喝を蒙り、直に三日、耳聾し、眼の黒むを得たりと。」（巻第六）とある（『国訳一切経 和漢撰述部 第十四巻』大東出版、一九八九年）。
- (13) 「月坡禪師行実」（『月坡禪師住加賀州金龍山天徳禪院語録』）
- (14) 『月坡禪師禪偈清吟』「関山琵琶苑居」の題詞を以下に挙げる。「寛文丁未七年夏五月、師徒を率いて行化して偶大津たまづに到る。一善信有り。久しく道風を重んず。欣然として拜謁して家に入れて供養す。遂に蟬丸翁が旧隠を関山琵琶苑に補つて以て師の一坐具地と作らんことを請う。師辞するに及ばずして留まる。因つて十偈を説く」（原漢文）。駒澤大学図書館所蔵本（請求記号、H152.1W/2）

(15) 注(11)に同じ。

(16) 駒澤大学図書館所蔵本（請求記号、152/W2）

(17) 柴山全慶・直原玉青『江湖風月集』（創元社、一九六九年）

(18) 秋月龍珉『禪の語録11 趙州録』（筑摩書房、一九七二年）

(19) 「五祖曰、譬如水牯牛過窓櫺、頭角四蹄都過了、因甚麼尾巴過不得。」（五祖曰く、譬えば水牯牛の窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了るに、甚麼に因つてか尾巴過ぐることを得ざる）（西村恵信訳注『無門関』岩波文庫）

※引用の資料には私に旧字・異体字を通行の字体に改め、濁点・句読点を付した部分がある。

〔付記〕本稿は令和四年三月五日、駒澤大学佛教文学研究所研究会（於駒澤大学）において「月坡道印の文事について」と題した発表の佳境詠の部分をもとに加筆したものである。席上ご教示下さった諸先生方に深く感謝申し上げます。

『菴居全集』の複製、掲載の許可を快く下さった駒澤大学図書館に深く感謝申し上げます。

月坡道印の詩作―佳境詠の視点から―（伊藤）